

浮世絵と “The Happy Prince”

三輪春樹

(跡見学園短期大学講師)

1862年に第二回のロンドン万国博覧会が開かれた。この1862年の博覧会はイギリスのジャポニスムに大きな影響を与えたと、言われている。この博覧会は、当時のヨーロッパで日本美術に触れる機会としては、それまでの最大規模のものであり、その公式カタログには「合計623点」の日本の出品物が記載されていた。これ以後イギリスにおける日本ブームは多きなうねりとなり、この時点から意外なほどのヴィクトリア朝の芸術家たちが日本美術を蒐集していた。

一方、ジャポニスムについて語る時、大陸における、特にパリの動向を見過ごすことはできないであろう。その中でも、浮世絵と印象派の関係はこれから私が検討しようとする Wilde の “The Happy Prince” と浮世絵の関係を見る上で重要になってくるのである。

1856年、印象派の一員である版画家の Félix Blaquemonde は印刷屋 Diâtre の仕事場で、日本から送られてきた陶器のバックグランドとして使われていた赤表紙の北斎の画帖を目にし、その美に感動する。これが一般に流布されている浮世絵の美の、ヨーロッパにおける発見のエピソードである。これ以後 Blaquemonde とその仲間たち（印象主義者）は、この異国の美意識を、自らの美術表現の中に取り入れ、新しい美のスクールを築くことになる。これら若いアーティストの中には、後にロンドンにわたり Wilde とも交流を持つ James Abbott McNeill Whistler もいた。

Whistler は他の美術家たちの多くがその絵画作品の中に、日本的なモチーフを配し、言わば日本趣味とも呼ぶべき作品を制作する中であって、絵画の構図法等を浮世絵から学び、実験的な制作を行った点で出色であった。

ここで、浮世絵の当時の伝統的なヨーロッパ絵画との違いを、その特色として整理してみると、

- (1) 高い視点、俯瞰的な視点
- (2) 浅い奥行き
- (3) 陰影法、あるいは明暗法の未発達
- (4) 自立的な強い色彩
- (5) 色面あるいは事物による大胆な画面の分割
- (6) 主要事物の切断あるいは画面からはみだし

以上のように考えられる。

平井博によれば、「ワイルドの美術に対する知識や観賞眼は、少なからずウイッスラーに負うところがあるのは、否めない事実であった」し、Bernard Shaw も Wilde の美術に関する知識が、多くを Whistler に負っていることを示唆する文を残している。Wilde 自身、日本美術、あるいは日本についてその著作 “The Decay of Lying” や “The Picture of Dorian Gray” の中で何か所か言及している。

さて、そこで具体的に Wilde の作品 “The Happy Prince” を検討してみると、まず特徴的なことは、王子の像が立っている町の中だけでそのストーリーが展開することである。しかも高い塔の上に立っている王子の像の目によって町は一望にされるので、あたかも一枚の絵を観賞するように、私達はこの物語を読み進むことになる。

High above the city, on a tall column, stood the statue of the Happy Prince.

この物語の冒頭はこのように語られている。この出だしによって、私達は日常的な視点とは違った、現実的ではない高い視点へと誘われるのである。私達は、王子と視点を共有することになり（後にはツパメ）、この物語が持つ非日常的な視覚空間、浮世絵の特徴でもある高い視点を物語の進行と共に経験することになる。

さらに色彩に関する表現の多さがこの物語の特徴としてあげられる。まるで色彩が洪水のように読者である私たちに押し寄せ圧倒するかのようだ。Wilde のこの物語は、その色彩表現の豊かさで、色彩のパッチワークのような印象を私達読者に与える。

さらに検討をすすめるなら浮世絵の他の特徴もこの物語の中にみて取れるのである。高い視点、自立的な強い色彩、空間の分割、主要モチーフの切断、浅い奥行き、明暗法等この物語と、浮世絵の視覚空間との間に類似性を見ることができるのである。

